

る。

○各禮す伽羅香世界——『錦繡段』龍麟洲の春日作に、點破
燕青黃世界。一株香雪小梨華。

○「長恨哥」に白樂天が「漢皇重色思傾國」といふ。
——この句は「長恨歌」の初句。

○「廣韻」に「凡非谷而食者曰肴。」——『廣韻』前出。
谷は穀の誤。また食者の者の字なし。

○「醉翁亭記」にも「山肴野蔌」と書たり。——「醉翁亭記」
は歐陽永叔の文。「古文眞寶」後集所載。

○かの「冷齊夜話」また「墨客揮犀」に出たる「白樂天每
作詩。令老嫗解之」云々——『冷齊夜話』は宋の僧覺
範、名は惠洪の撰。十卷。自らの見聞したところを雜記して
ゐるが、多くは詩話である。寛文以後しばしば刊行せられ
た。「墨客揮犀」は宋の彭乘の撰。十卷。宋代の遺文軼事
から詩話文章の評なども記してゐる。惟中の文は「詩人玉
屑」に見え、卷八の「樂天」の項には「冷齊夜話」より、卷
十六の「老嫗解詩」の項には「墨客揮犀」よりの引用を明か
にしてゐる。恐らくは「詩人玉屑」を見たものであらう。

○車胤が螢を集て學文したる故事也。——『圓機活法』文學
門、勸學の「囊螢」に、晋車胤字武子。精勤不_レ倦
博覽多通。家貧無_レ油。夏月練囊。盛_二數十螢火_一。
以_レ照_レ書_レ讀_レ之。(昆蟲門、螢の「囊盛照書」にも見え
る。)これは「晋書」の列傳によつたものであるが、「蒙求」
「車胤聚_レ螢」にも見える。

○「三昧の詩」の「輕羅小扇撲_二流螢_一」とある王建が作
したる——『三體詩』六卷、宋の周弼字は伯弼の撰。唐の作

家百六十七人の七絶・七律・五律の三體に分類して、實接・
虛接・用事・前對等の格に分つて作詩者の參考にせんとした
ものである。わが國では五山の詩僧の間に流行し、江戸時代
を通じて博く讀まれた書である。詩句は王建の「宮詞」二首
の中。銀燭秋光冷畫屏。輕羅小扇撲_二流螢_一。玉
階夜色涼如水。臥看牽牛織女星。(この詩は_一に
王建字仲和。大曆十年の進士。陝州司馬となる。韓愈・張籍
等と深交があつた。樂府を能くし宮詞に長じた。著に『王司
馬詩集』十卷がある。

○「易」の九四「或躍在淵」といふ乾龍の詞——乾の九四の
爻辭。「或躍在淵。无_レ咎。」『易』では陰爻即ち_一は六、
陽爻即ち_一は九と呼ぶ。六本の爻を下から數へて初二三四五
上と云ふ。九四とは下から四番目の爻が陽爻である。この爻
の説明義理を爻辭(象辭)といふ。六十四卦の三百八十四本
の爻にすべて爻辭がある。

○一時の光陰をいたずらにしたまで也。——朱熹の偶成、少年
易_レ老學難成。一寸光陰不可_レ輕。

○今よりのちはいはじやきかじ。——『論語』「泰伯」に、而
今而後。吾知_レ免夫。(而今而後は今
より後の意)

て、許渾が作りし也。——乾注⁵⁰『唐詩』の「贈王山人」の題で前句注の庚申の詩が出てゐるとあるが、思ふに「三體詩」に許渾の「送隱者」の七絶があるが、これであらう。即ち、無媒逕路草蕭蕭。自古雲林遠市朝。公道世間惟白髮。貴人頭上不曾饒。

○「泉甘而土肥」と古人の作あり。——出典未詳。

○『論語』曰「子在川上」——『論語』二十篇、集註十卷、正義二十卷。孔子が弟子や時人と問答したものが中心となつてゐる。簡潔な文で書かれてゐる。孔子歿後門人たちの編輯したものと考えられてゐる。十三經或は四書の一として、儒學の最も重要な經典として尊崇せられてゐる。我が國への傳來は最も古く「千字文」と共に應神天皇の朝である。

○晋の竇滔が妻蘇若蘭、旅に居る夫を戀て、回文錦字の詩を送りし心也。——乾注⁵¹に「侍兒小名錄」を引かれてゐるが、これによれば若蘭の名が現はれない。これは恐らくは「圓機活法」人倫門、夫婦の「寄錦回文」の引用であらう。即ち、晋竇滔妻蘇氏。名蕙。字若蘭。滔符堅時。爲秦州刺史。被徙流沙。蕙織錦爲文。旋圖詩以贈滔。宛轉循環以讀之。辭甚悽惋。凡八百四十字。

○小野篁が詩、白樂天が詩に同じく作合せし事三首まで有。——乾注⁵²の他に、『江談抄』に見える、嵯峨天皇が河陽館に行幸せられた時に、白樂天の詩句の、閉閣唯聞朝暮鼓。登樓遙望往來船。の句を篁に示された。原詩は空望とあつたのを遙望に改めて示されたのであるが、篁は遙を改めて空に作られたならば聖作は更に妙ならんと奏した。天

皇は卿の詩情は樂天に同じと宣はせられた。これもその一であらう。

○「義楚六帖」といふあり。「秦時。徐福云々」——『義楚六帖』二十四卷。後周の義楚の撰する類書。五十部四百四十門に分つて類聚して六帖としたのでこの名がある。この書は彼の地に亡んでわが國に傳はる。寛文の刊本がある。徐福一に徐市に作る。琅邪の方士。秦始皇の時に上書して海中に神山あり、仙人の居住するところと奏した。始皇は徐福に童男女數千人を與へて、海に入つて仙薬を求めしめたが歸らなかつたといふ。或は我が紀州に至つて死んだともいふ。

○「阿房宮の賦」に、「秦人不暇自哀云々——この賦の結語の辭

○「老去」といふ題にて、丁直卿が「老去胸襟無雪月」といふ心、——『錦繡段』に見える。詩は、茅檐曝背數歸鴉。冷淡思量到日斜。老去胸襟無雪月。多時不夢見梅花。丁直卿は宋人。傳未詳。

○阿房宮は秦の始皇の奢を究たる宮殿の事を出たり。たれがさだめて「阿房」の出所とはせらるゝぞ。——阿房宮は「阿房宮賦」の意。阿房の意は「古文眞寶」の注に、始皇三十五年。以咸陽人多。先王之宮庭小。乃營作朝宮渭南上林苑中。先作前殿阿房。……周馳爲閣道。自殿下直抵南山。表南山之顛以爲闕。爲復道。自阿房渡渭。屬之咸陽。……阿。山曲也。房。旁也。乃舊地名。とある。

○「朗詠」の詩に「玄鶴」——玄鶴の讀みがなを「ゲンハク」とあるが、「ゲンカク」又は「ゲンクワク」とすべきであ

を靖節先生といふ。性曠懷にして榮利を慕はず。その詩は後世の自然詩人たちの私淑するところとなつた。著に『陶淵明集』十巻がある。「雲無心而岫」は「歸去來辭」に見える。

○本字は閩の字なり。この字、從門出入白也。また當所にある俗字に達せる人の申されしは、闔の字也。二つながら夢にもしられぬ字也。——閩に「チン」の讀みがなががあるが「チウ」である。門關即ち「くわんぬき」。從門出入之白也の出典未詳。闔は門の扉。轉じて閉る意がある。「説文」に闔、門扉也。また闔、一曰、閉也。とある。これに「カツテ」と讀みがなを施してある意は不明。惟中が夢にもしられぬ字といつてゐるが、閩の用例は少いが、闔の字は珍しい字ではない。特に「すべて」の意の用例は少くない。

○『孟子』「孟獻之在友。五人焉。樂正・牧仲・其三人則忘之」——萬章下篇に見える。但し樂正の下に裘の字、三人の下に予の字を脱す。この人は樂正と牧が姓、裘と仲が名。『孟子』七篇十四卷は周の孟軻の撰。(實際はその門人たちの撰。)

文は問答體が多く、雄辯整然、剛勁簡潔で、『韓非子』と共に先秦文學の雙璧である。孟軻は孔子より約百年後に生れ、業を子思の門人に受けた。學成つて齊・梁・滕・宋等の諸國を歴訪して王道を説いたが容れられず、郷里に歸つて子弟を教育した。その説くところは性善を本とし、仁義王道を行ふことを主張した。周の郝王の二十六年卒した。年八十四。亞聖と稱せられ、文章では韓愈と併稱して孟韓と云ふ。

○魯哀公問于孔子曰。予問忘之甚者云々——乾注(44)『孔子家語』の出典を明かにせられてゐるが、惟中の本

文とかんがりの異同があるので、左に原文を示す。哀公問於孔子曰。寡人聞忘之甚者。徒而忘其妻。有諸。孔子對曰。此猶未甚者也。甚者乃忘其身。魯哀公名は蔣、定公の子。哀はその諡。三桓に攻められて國外に逃れ、衛・鄒・越に奔つたが、後國人に迎へられて復歸した。在位二十七年。

○『韓子』曰。「齋桓公伐孤竹」云々——『韓子』は『韓非子』で、この文はその「説林上」に見える。但しこの文は、韓子曰より全文がそのまま『圓機活法』走獸門、老馬の「辯道」に見える。從つてこの引用と思はれる。「韓非子」の他『蒙求』「管仲放馬」にも見えるが、文字が若干異同がある。なほ齋は齊の誤。「印は『韓子』を含めて、即ち『韓子』の上に附すべきである。『韓非子』は唐以前にはただ『韓子』と云つたが、韓愈が出ずるに及んで、何れも韓子であつて誤り易いので、韓非と名を附して呼ぶ習慣となつた。『韓非子』二十卷、五十五篇。戰國の韓非の著。刑名の主張が述べられてゐるのであるが、文章は精深峭刻、奇古典雅で法家文學の粹と云はれる。

○『朗詠』「庚申」の詩に「夜寒初共守庚申」とある許渾が作、——『和漢朗詠集』雜の庚申に、「年長每勞推甲子。夜寒初共守庚申。許渾字は用晦。太和六年の進士。監察御史、虞部員外郎を歴て睦郢の刺史となる。詩に巧で整密と云はれる。著に『丁卯集』がある。

○「夢をもやす」とも詩に作つた——乾注(49)岑參の詩は「三體詩」所載。なほ注の「寒杼」は「寒杵」の誤。

○そのそこに隱者の味ひ甘うして「送隱者」といふ題に

○『朗詠』の詩に、「留_レ春不用_二關城固_一」といふ詞——
 『和漢朗詠集』春に、留_レ春不用_二關城固_一。花落隨風
 鳥入_レ雲。(尊敬の
 三月盡)

○『淮南子』「魯陽公、與_二韓構戰_一。云々——『淮南子』二十
 一卷。前漢の淮南王劉安の撰、高誘の注で行はれてゐる。

『老子』の無爲恬淡の影響が最も大きく、儒家の説を雜へて
 ゐる。説くところは治亂興亡、吉凶禍福等より、世上の詭説
 奇聞に及んでゐる。この惟中の引用するところも、かなり文
 字に出入があり、この訓點では意味の通じないところがある
 ので、原文を次に記する。魯陽公與_レ韓構_二戰_一。戰酣_ニ日
 暮_ル。援_レ戈而搗_レ之。日爲_レ之反_ニ三舍_一。(覽冥訓)

○『錦繡段』に子陵が「釣臺」といふ題にて「萬事無心一
 釣干。三公不_レ換此江山。」と載復古が作したる詞——
 『錦繡段』は五山の詩僧天隱龍澤の撰。唐・宋・元・明の七
 言絶句を選んで、詩を學ぶ童蒙初學者の爲に便ならしめんと
 したるもの。二百十二家の詩三百二十八首を、天文・地理・節
 序等十八の部門に分類してゐる。江戸時代を通じて廣く行は
 れた。本文に、子陵が「釣臺」とあるのは、「子陵が釣臺」
 とすべきである。詩題は「子陵釣臺」である。子陵は嚴光
 の字。後漢の人。嘗て光武帝と遊學す。帝が即位するに及ん
 で、姓名を變へて隠れ、富春山に耕して死んだ。年八十餘。
 後人は彼の釣する處を嚴陵瀨或は子陵釣臺と呼んだ。嚴州府
 城の東にあり。子陵釣臺は古來詩人の好んで詠ずるところと
 なつてゐる。この詩句は起承であるが、轉結は、平生恨
 識_二劉文叔_一。惹得_二虛名滿_二世間_一。作者の載復古は戴
 復古である。戴復古字は式之、石屏と號す。宋の寧宗の慶元

中の頃の人。詩に巧みて『石屏集』六卷がある。

○『阿房宮の賦』に「煙斜霧橫焚椒蘭也。」とあるは——「阿
 房宮賦」は杜牧の作。『古文眞寶』『文章軌範』所收。阿房
 宮は秦始皇の三十五年、渭水の南の上林苑に造營した壯麗な
 宮殿で、この様子は「阿房宮賦」に見えるところである。こ
 の句の意は「椒蘭の香氣が煙霧の横はつてゐるやうだ。」阿
 房に「アハウ」と讀みがあるが、「アパウ」と濁つた方
 がよい。

○張翰が好物は蓴菜の羹、鱸魚の鱠也。……『蒙求』の標題に
 「張翰適意」「陶潛歸去」とある對の詞にて付たり。——乾
 注(36)に「晋書」の引用とせられるが、後に『蒙求』の標題が
 出てくるので、『蒙求』の引用と觀るべきであらう。勿論『蒙
 求』の文は『晋書』から取つたものである。乾注(38)も『蒙
 求』の標題であつて、右と同様である。なほ乾注は東帶の下
 に見の字を、解印の下に綬の字を脱してゐる。なほ陶潛の潛
 の讀みがなほ「サン」でなくて「セン」であることは前述の
 通りである。張翰字は季膺。晋人。清才ありて能く文を屬
 す。性至孝、嘗て齊王冏に仕へて東曹掾となつた。秋風の起
 るに因つて、吳中の菰菜・蓴菜・鱸魚を思ひ、遂に賀を命じ
 て歸つた話はこの文にも引かれて有名である。

○彼陶淵明が書し賦の「雲無心而出_レ岫」とある詞、——
 陶淵明名は潛、字は元亮、淵明はその號。晋人。大將軍陶侃
 の曾孫。嘗て貧の爲に彭澤の令となつたが、「五斗米の爲に
 腰を屈して郷里の小兒に見えんや」と云ひ、これを罷めて歸
 り「歸去來辭」を作つて田園の生活を樂んで再び仕へること
 をしなかつた。詩酒を好み、元嘉四年六十三歳で卒した。諡

○陸雲字士龍、有笑疾。上船於水中、見影大笑。落水云々——乾注④に『晋書』五十四とあるが、本文は次の通りであつて、惟中の文とかなり前後するところがあるので、念のために示す。雲字士龍。六歲能屬文。性清正。有才理。少與兄機齊名。……機初詣張華。華問雲何在。機曰。雲有笑疾。未敢自見。俄而雲至。華爲人多姿制。又好帛繩纏鬚。雲見而大笑。不能自己。先是嘗著綾經。上船於水中。願見其影。因大笑落水。人救獲免。陸雲字は士龍。晋人。陸機の弟。兄と名を齊うして二陸と稱せられた。成都王穎に表せられて清河内史となり、次いで大將軍右司馬となつた。穎の晩節政衰へたので、彼はしばしば正言を以て旨に忤ひ、機は誅せられ、雲も亦害せられた。その文は詞藻麗密、旨意深雅と云はれる。著に『陸士龍集』がある。ここにある如く愛笑の癖があつたので、笑癖を陸雲の癖といふ。

○『易經』三百六十四爻も、たゞ時の一字、——『易』は三百六十四爻でなくて、六十四卦三百八十四爻である。爻は『易』の卦を作るもので、一陽爻と一陰爻とある。この爻が六つ重なつたものを卦と云ひ、これで事物の變化を説明する。『易』を「時の一字」といふのは、『繫辭傳』に、「爻者言乎變化者也。」「六爻相雜。唯其時物也。」などと見える。現象はみな變通であり、變通は時の連續から起る。この變通を極めんとするのが『易』であるから、かく云つたものであらう。

○彼の屈原に對する「漁父の辭」にも「能與世推移」とこ

そ書たれ。——屈原名は平、靈均と號す。原はその字。戰國楚の貴族。三閭大夫となつて懷王の信任を得たが、讒にあつて追放せられた。しかし王を憂ひ國を歎じ、遂に汨羅に投じて死んだ。彼の作るところの離騷・九歌・遠遊・漁父等の諸篇は『楚辭』に收められてゐる。これは南方の文學の精華たるものである。「漁父辭」は屈原が漁父との問答によつて、自己の潔白廉直を示し、世俗の塵埃を蒙り得ない心情を吐露した短文。『文選』『史記』本傳、『古文眞寶』後集にも收められてゐる。本文に、漁父曰。聖人不凝滯於物。而能與世推移。とある。即ち漁父に語らしめた語であるから、「屈原に對する」と云つたのである。

○もろこしの文牋も三たび變じたり。——乾注④かな交り文で示されてゐるので原文を示すと、自漢至魏。四百餘年。辭人才子。文體三變。(沈約の宋書謝靈運傳論。『文選』所載)

○「死せる孔明、生ける仲達をはしらしむる」たぐひ也。——

乾注④『通鑑綱目』に、諸葛亮卒於軍。長史揚儀整軍而還。百姓奔告司馬懿。懿迫之。姜維使儀若反旗鳴鼓將向懿。懿不敢逼。百姓爲之諺曰。死諸葛走生仲達。(『三國志』の『蜀志』の諸葛亮傳の注にも、同意の文がある)

○管城公といふ筆を固として、——『圓機活法』器用門、筆の「管城子」に、「韓文公毛穎傳」毛穎中山人。秦蒙恬南伐楚。次中山。將大獵以懼楚。以連山筮之。筮者曰。今日之獵。不角不牙。衣褐之徒。缺口而長鬚。入竅而跣居。獨取其毛。簡牘是

負。遂獵圍毛氏之族。拔其毛。載穎而歸。秦皇帝賜湯汁。封諸管城。號管城子。(筆を管城子、管城公といふ)

なし、或は性に善惡混ざる説を主張した。性猶_レ湍水_一(告)生之謂_レ性。(全)食色性也。(全)と云ひ、性説の展開に大きな役割を果たした。

『佛_レ破邪顯正評判之返答』 乾注拾遺

○彼螳螂が斧を以て龍車にむかふたとへ、——乾注(2)に、『莊子』天地篇とあり。『天地篇』にも見えるが、『人間世篇』にも見える。『天地篇』は外篇第十二、『人間世篇』は内篇第四であるから、『人間世』を擧げるべきであらう。引用文に若干の出入があるのでそれを示すと、汝不知_レ夫螳螂_一乎。怒_レ其臂_一以當_レ車轍_一。不知_レ其不_レ勝_レ任也。龍車は天子の車。

○蚊蚋の鼻上をはしるたぐひ、——乾注(3)に『後漢書』「孔融傳」を引かれるが、別に『莊子』天下篇に次の語がある。由_レ天地之道。觀_レ惠施之能_一。其猶_レ一蚊一虻一虻之勞_一者也。其於_レ物何庸。

○もろこしには韓退之を打て『非韓』を作り、『非韓』をなじりて『非非韓』をあらはし、——乾注(5)『非韓』は戰國の法家韓_非を誹つたもので、韓退之ではない。韓退之は唐人で時代錯誤である。『非韓』の最初に、韓子之術とあるために誤つたのであらう。韓非も韓愈も共に韓子で、混同を避けて唐以後は韓非子と呼ぶやうになつた。『非韓』は『論衡』卷十に見える。『非非韓』未詳

○古語に「臨淵羨_レ魚。不_レ如_レ退而結_レ網」とみえぬ。また後に、

「臨淵羨_レ魚。不_レ如_レ退結_レ網」といへる古語をわすらるゝな。——前者は乾注(10)に董仲舒の「天人策」を、後者は乾注(8)に『漢書』を引かれてゐる。『漢書』は「禮樂志」に見えるが、これでは後半が、不_レ如_レ歸而得_レ網とあるので當らない。前者或は「圓機活法」鱗介門、魚の「結網」に「董仲舒策」として見えるところが妥當である。

○もろこしの名儒、陸象山をうたれし朱子の問答——陸象山と朱子については前述。朱子と陸子との問答は『朱子語類』『宋儒學案』に見える。

○陽明の『傳習錄』を打たる馮貞白が『求是篇』——陽明、姓は王、名は守仁、字は伯安、陽明はその號。明の大儒。官は兵部尙書に到る。嘉靖七年卒す。年五十七。文成と諡し、新建侯を贈られた。始め佛老を學び、悟るところがあつて正學に復歸した。陸象山の學を繼いで一家を爲し、致良知、知行合一の説を唱へ、世に陽明學と稱する。陸王と併稱せられる。著に『王文成公全書』がある。『傳習錄』三卷、陽明の女婿徐愛の撰。陽明の語録である。書名は『論語』の、傳不_レ習乎に基く。馮貞白は馮貞白の誤。讀みがなも「フ」でなくて「フウ」である。貞白名は柯、貞白はその號。明人。隆慶五年『傳習錄』を分章摘段して、その弊を改め是を求めんとして『求是篇』を作つた。四卷、六十八章よりなる。その自叙に、陽明は儒釋の本體を異にするを知らずと評してゐる。我が國では慶安三年の刊本がある。

○天下の愚盲を開く。——愚盲は愚蒙、或は愚瞽の誤りであらう。盲はめしひで意味が通じない。音から來た誤記であらう。芭蕉の文にもこの例がある。

しては、牢落乾坤大。(奉寄河南)牢落官軍遠。(傷春)牢落值顔閔。(贈鄭十)などがある。

○初祖大師は合點か。南印度香至王第三の子達磨大師の事ぞ。

蒼海萬里の江をふなわたりして、梁の武帝にまみえて、無功德の話をしめされた。——乾注(60)「會元一達磨章」を引

かれてゐるが、『景德傳燈錄』ではないかと思ふ。即ち卷三に、第二十八祖菩提達磨者。南天竺國香至王第三子也。……師汎重溟。凡三周寒暑。達於南海。實梁普通八年丁未歲。九月二十一日也。

廣州刺史蕭昂。具主禮迎接。表聞武帝。帝覽奏。遣使齎詔迎請。十月一日至金陵。帝問曰。

朕即位已來。造寺寫經度僧。不可勝紀。有何功德。師曰。竝無功德。

○『小學』の語とは見られたぞ。——乾注(60)の引用は當らないやうに思ふ。的確な語句が見當らないが、「明倫」の、夫婦之別の項にはこれを想像させるものが多い。

○「曲禮」の語ではおじやらぬか。——『禮記』の「曲禮」上の、男女不雜坐。不同櫛。不同巾櫛。不親授。嫂叔不通問。とあるのを云つたものか。

○『莊子』に奇妙の置字・捨字あり。——例へば「逍遙遊」の、置杯焉。則膠。有蓬之心也夫。彷徨乎。逍遙乎。「齊物論」の、物謂之而然。焉。也。乎。而などの文字を云つたものか。

○文王・武王の大武をしらずや。——文王姓は姫、名は昌。武王・周公旦の父。聖徳あり、西伯となつた。仁政を布いて徳化は四鄰に及び、諸侯の歸する者四十餘國に及び、周室の基

礎を爲した。武王名は發、文王の子、周公旦の兄。殷の紂王を伐つて天子の位に即き。國號を周と稱し、鎬に都し、諸侯を天下に封じた。文王と併せて文武と云ひ、聖王と稱せられる。

○「箚恭にして天下平」は子思の語ならずや。——子思は孔子の孫、伯魚の子。名は伋。業を曾子の門人に學ぶ。「中庸」を著して儒教の心性哲學の根柢を作つた。

○無爲にして天下をおさむるは大舜ならずや。——舜は中國古代の聖王。有虞氏といふ。父の瞽叟は頑、繼母は嚚であつたが、兩親に事へて至孝であつた。五十歳で堯帝の攝政となり、堯が崩じて帝位に即き、禹・后稷等の賢臣を用ひて國は大いに治まつた。在位三十九年で崩す。

○朱子に敵する陸象山——朱子名は熹、字は元晦・仲晦、晦庵・晦翁・雲谷等と號した。南宋の大儒。周惇頤の大極説、程子の理氣二元説・居敬窮理の説、張子の心性説等を融合して宋學を大成した。その學を朱子學といふ。寧宗の慶元六年に歿した。年七十一。『四書集註』『近思錄』『通鑑綱目』その他著書が多い。陸象山名は九淵、字は子靜。朱子が經驗的歸納的であつたのに對して、陸子は直覺的頓悟を主とした。また朱子の二元論に對して、心即理の一元説を立てて相對峙した。世に朱陸の争と云ふ。紹熙三年卒。年五十四。

○象山死して朱子のいはく、「壓倒一告子」とのたまひぬ。——『朱子語類』卷一百二十四に、象山死。先生率門人。往寺中哭之。既罷良久曰。可惜。死。了。告子。(陸)告子は戰國の人。孟子と辨難したことは『孟子』「告子篇」に見える。彼は孟子の性善説に對して、性に善惡

てゐる。「キヨクレイ」と讀みがなが施してあるが、一般には「キヨクライ」と讀む。

○『莊子』に孔子と盜跖が問答あり。——盜跖は魯の人。生存の時代に諸説がある。但し孔子との問答は寓言である。彼は徒黨數千人を集めて人を殺し、暴戾恣睢であつたといふ。賢者柳下惠の弟とする説も亦た『莊子』の寓言である。

○掬水月入手——乾注(初)『詩人玉屑』卷三に見える。入手は、在手である。詩は、春山多勝事。賞翫夜忘歸。掬水月在手。弄花香滿衣。興來無遠近。欲去惜芳菲。南望鳴鐘處。樓臺深翠微。

○「藏月入懷中」とは白樂天が扇の事、——乾注(48)の通り『和漢朗詠集』に見える。その詩句は、盛夏不消雪。

終年無盡風。引秋生手裏。藏月入懷中。

○陸士衡が詩に「照之有餘暉。攬之不盈手」ともみえ、——『文選』『玉臺新詠』所收。擬明月何皎皎と題する詩。安寢北堂上。明月入我牖。照之有餘暉。攬之不盈手。涼風繞曲房。寒蟬鳴高柳。

云々 陸士衡名は機。太康の末年に仕官して將軍河北大都督に進んだ。後に長沙王を討つて敗れ、太安二年軍中に殺害せられた。年四十二。『陸士衡集』十卷がある。詩賦は華麗と稱せられる。

○杜工部が詩に「步屢中庭月趁人」ともあり。——この詩は杜甫の作ではなく『東坡先生集』卷六に見える、臺頭寺歩月得人字と題するもの。即ち、風吹河漢掃微雲。歩屢中庭月趁人。浥浥爐香初泛夜。離離花影欲搖春。云々。従つて歩履は歩屢。履と屢と別

字。杜工部は杜甫のこと。工部員外郎となつたのでその集を『杜工部集』といふ。杜甫字は子美、少陵と號す。審言は祖父。年二十六、父閑が克州の司馬となつた時、父に従つて齊趙の間に遊んで詩思を養ひ、李白と交つた。安祿山の亂に肅宗に行在に謁して左拾遺を拜した。後事に坐して華州司功參軍に貶せられた。時に關中飢饉で盜賊四方に起り、妻子艱難を極めて、兒女の餓死する者あり。彼は官を罷めて秦州に寓居した。後、上元元年劍南の節度使嚴武に登庸せられ、成都の浣花溪に廬を結び、酒に親しみ吟詠を事とした。大曆元年亂を避けて放浪し、同五年洞庭湖畔に客死した。年五十九。

その詩の多くは慷慨血淚、沈鬱頓挫と云はれる。特に叙事詩に長じ、詩格嚴正、句法變化に富み、後世詩聖と仰がれ、世に「詩史」と稱せられる。また李白と併稱して李杜と云ひ、杜牧の小杜に對して老杜と呼ばれる。

○古詩に「踏碎階前明月」ともあり。——『圓機活法』天文門「歩月」の「踏碎」に、古詞。踏碎階前明月。來尋夢裡閑雲。とある。原典は古詩でなく古詞である。

○浪人は浪倒のこゝろにて、たゞおちぶれたるものをいふなり。——浪倒の語は管見で知らないのであるが、或は潦倒ではあるまいか。潦倒には老いぼれること、おちぶれるさまである。例へば杜甫の登高に、艱難苦恨繁霜鬢。潦倒新停濁酒杯。がある。

○杜子美の詩に「牢落」とつくりてをいたぞ。——牢落の語は杜甫に始まるものではなく、既に『文選』に用例がある。心牢落而無偶。(陸機の) 牢落陸離。(司馬長卿の上林賦) 杜甫の用例と

と稱した。翰林學士・左拾遺に上つたが、江州司馬に貶せられた。後刑部尙書となり、七十五歳で卒した。著に『白氏文集』七十五卷がある。詩は平易流暢を旨とした。平安朝以來國文學に最も大きな影響を與へた人物である。『和漢朗詠集』には最も多く載録せられ、長恨歌・琵琶行等の詩は、わが國人の最も誦詠せられるところとなつた。

○『白虎通』——四卷。正しくは『白虎通義』といふ。漢の班固の撰。章帝の建初四年、諸儒を白虎觀に會して五經の異同について講ぜしめ、『白虎通德論』を作つた。後に班固が撰集して一書としたもの。なほ白虎を「ハクコ」と讀みがながあるが「ビヤツコ」である。

○「蒼髯 如_レ戟 畫_レ崢嶸」と作れる陳元信が詩、——『錦繡段』所收。松棚と題す。詩は、旋斫_レ松枝 架_レ作_レ棚。蒼髯如_レ戟 畫_レ崢嶸。清陰堪_レ愛 還_レ堪_レ恨。遮_レ卻斜陽 礙_レ月明。(髯如_レ戟とは『通鑑』に見える。宋山陰公主謂_レ諸彦案したもので、松の葉の髯) 陳元信は傳未詳。

○宗璟が詩に「頭如_レ青山峯」ともあり。——宗璟の傳も詩句の出典も未詳。

○馬の耳にかぜのたかふくか。——蘇東坡の和何長官六言に、説向_レ市朝公子。何殊_レ馬耳東風。また陸放翁の和范待制秋興に、一生不作_レ牛衣泣。萬事從_レ渠馬耳風。

○古詩に「三十年前知己友」などみえたり。——詩句の出典未詳。知己の「チコ」との讀みがなほ「チキ」である。

○魯國にある人、やどをかへぬるとて我ふさいのつまをさへうち忘れてのこし置たる事あり。『孔聖全書』にあるが、——

乾注(30)に『孔子家語』の引用とあり。原文の引用がないので、その文を次に記すると、哀公問_レ於_レ孔子曰。寡人聞_レ忘_レ之_レ甚_レ者_レ也。徒_レ而_レ忘_レ其_レ妻_レ。有_レ諸_レ。孔子對曰。此猶_レ未_レ甚_レ者_レ也。甚_レ者_レ乃_レ忘_レ其_レ身_レ。『孔子家語』は十卷。孔子の言行と問人の問答の語を録したものである。これは魏の王肅の偽作と云はれ、『左傳』『國語』『孟子』『荀子』『大戴禮』『禮記』等から孔子に關する記事を集めて類別したものである。なほ『孔聖全書』と名づくる書はない。

○「一葉ちる」と付たるなり。これほど天下のあきをしるたしかなる付心を、——乾注(4)『類船集』を引かれてあるが、この書は延寶四年の刊行で、この『しづ團返答』はその前年延寶三年の刊行であるから、出典としては當らないであらう。

『文錄』(この書)に、山僧不_レ解_レ數_レ甲子。一葉落_レ知_レ天下秋。また『圓機活法』節序門の「立秋」の、「一葉落」に、淮南子。一葉落而天下知_レ秋。また同じく樹木門の「木葉附落葉」にも見える。或は『禪林句集』の七言に、一葉落_レ知_レ天下秋。とある。

○身は常に南窓により、和漢の書くりひろげて、——陶淵明の歸去來辭に、倚_レ南窓_レ以_レ寄_レ傲。審_レ容_レ膝_レ之_レ易_レ安。

○「盡」の字は「極也、過也」などの註解あり。——例へば『康熙字典』の盡に、次の「曲禮」の、虛坐盡後。を擧げて、盡。極。視盡_レ物_レ之_レ貌。とあり、『呂覽』の「明理」に、五帝三皇之樂。盡_レ之_レ矣。の注に、盡。極。と見える。なほ盡に過の意のあることを知らない。

○「曲禮」にも「虛坐盡後」云々——「曲禮」は『禮記』の開卷の篇名。この篇には禮儀作法に關する事項が述べられ

○陶潛逢酒熟。取頭上葛巾漉之。畢還復着之。
——乾注《晉書》「陶潛傳」を引くとせられるが、『晉書』
にこの文なし。『南史』七十五の「陶潛傳」には、潛逢其
酒熟。取頭上葛巾漉酒。畢還復著之。とあるの
に依つたと思はれる。『陶淵明集』の昭明太子の序にもこれ
に似た文がある。なほ陶潛を「タウサン」と施してゐるの
は、「タウセン」である。

○「左傳」に「石言晉魏榆」とあり。——昭公八年。原文
には晉魏の間に于の字がある。『左傳』は正しくは「春秋左
氏傳」といふ。三十卷。『春秋』(魯の歴史。孔子が魯の國の記
隠公から哀公まで十一代二百四十二年間の、天災地變、征伐會盟など
について、善惡を辨じ、名分を正し、大義を掲げて後世に傳へようと
した書。編)の記事が極めて簡潔なために、それを詳述解説し
たもの。著者は異説が多いが、古くは孔子の門人の左丘明と
いはれる。

○「春色惱人不得眠」と王荆公が作し、——乾注《夜直詩》と題する詩とあるが、詩題は「夜直」で詩の字は
ない。『錦繡段』には春夜作とある。詩は、金爐香燼漏
聲殘。剪剪輕風陣陣寒。春色惱人眠不得。月
移花影上闌干。即ち、不得眠は眠不得である。
『聯珠詩格』所收。王荆公名は安石、字は介甫、半山と號
す。荆公は荆國公に封ぜられたので云ふ。幼少より讀書を好
み、詩文に巧であつた。神宗の時相となつて新法を行ひ、司
馬光・蘇軾等と争つた。文は雄勁峭峻、詩は雅麗精絶で特に
絶句を得意とした。『臨川集』その他著書が多い。

○王勃が「滕王閣の序」をかきしに、「陣驚寒。聲斷
衡陽浦」と作りたり。——「陣驚寒。聲斷
衡陽浦」と作りたり。——「陣驚寒。聲斷
衡陽浦」と作りたり。——「陣驚寒。聲斷
衡陽浦」と作りたり。

作る。『古文眞寶後集』所收。王勃字は子安。隋末の大儒
王通の孫。初唐の四傑の第一に擧げられる人物である。幼時
から天才の譽高く、弱冠ならずして對策して朝散郎を授けら
れた。後鬪雞の楸文を作つて高宗の怒りに會ひ、父福時も坐
して交趾に貶せられた。勃は父を省せんとして、航海中に水
に落ちて死んだ。年二十九。

○在地願作連理枝。——作の字、諸本爲に作る。

○契られしきめ言、たゞふたりのことなれば、さすがの方士
幻術の仙たりし蓬萊までさがしありかれし者、——「長恨
歌」に、七月七日長生殿。夜半無人私語時。注
に、天寶十載。明皇憑楊貴妃肩。仰天感牛女
之事。密相誓。心願世世結爲夫婦。とある。
〔古文眞寶前集〕同じく、爲感君王展轉思。遂教
方士殷勤覓。排空馭氣奔如電。升天入地求
之遍。上窮碧落下黃泉。兩處茫茫皆不見。ま
た陳鴻の「長恨歌傳」に、出天界沒地府。以求之
不見。又旁求四虛上下。東極絕天海。跨蓬
壺。〔白氏文集〕所收)

○「長恨歌」といひて、唐の白居易がつくりたるものにある
ぞ。——「長恨歌」は白樂天の長篇の七言古詩。内容は唐の
玄宗皇帝が楊貴妃を寵愛して政事を怠り、安史の亂を起すこ
となつて天下大いに亂れ、長安は陥つて玄宗は蜀に幸する
こととなつた。途中楊貴妃は馬嵬驛に殺された。玄宗は貴妃
のことを思つて忘られることがなかつたといふことを述べて
ゐる。「長恨歌傳」はこの詩の成つた後に陳鴻に命じて作ら
せたもの。白居易は字は樂天、香山居士と號し、醉吟先生

るので、五千餘言は『老子』五千餘言を引いたものと思はれる。なほ前句の第一儀についても、『老子』首章の林注に、道本不_レ容_レ言。纒_レ涉_レ有_レ言。皆是第二儀。も参考になるであらう。

○八九間またうへもなきまりの品——陶淵明の歸_二田園居_一に、方宅十餘畝。草屋八九間。

○峰の雪一割半やのこるらん——李白の登_二金陵鳳皇臺_一に、三山半落青天外。二水中分白鷺洲。(雲を雪に、落ちるを殘るに山は半ば雲に掩はれて、恰も青天の外から落ちたやうだ。)

『しづ團返答』 乾注補遺

○木頭僧袖之而有_レ敲余月下門。……湓引袖而入_二鳥宿池中樹下菴焉_一。——賈島の題_二李凝幽居_一に、閑居少_二鄰竝_一。草徑入_二荒園_一。鳥宿池中樹。僧敲月下門。(『三體詩』所收)

○『俳諧蒙求』——唐の李瀚の著の『蒙求』の意を取つた名。蒙求とは『易』の蒙卦の、童蒙求_レ我より取つたもの。この書は四字句の韻語で標題とし、古人の事蹟の相類似したものを併記して、童蒙初學者の記誦に便ならしめたものである。我が國では平安朝以來廣く行はれた書である。この語を取つて俳諧を冠したのは、俳諧の基礎的啓蒙的知識の意として用ひたものであらう。

○眞實に物我をやめて、とくと心をしづめて、——『莊子』の「齊物論」に、天地與_レ我竝_レ生。而萬物與_レ我爲_レ一矣。(物我をやめるとは物我の對立を排して、一體の境致となつての意。)

○古徳の語に、直透_二萬重關_一。青宵裏にもとまらず——『禪林句集』に『臨濟録』を引いて、直透_二萬重關_一。不住_二青宵裡_一。

○白眼にして他の世上の——乾注(6)この詩は王維の作。

○隠々雷聲欲_レ暮天。欺_レ風偷_レ到玉堂前。——この詩は『圓機活法』昆蟲門、蚊の起句の項に見える。

○陰陽のふたつ生々不息なるもの也。——『周易』「繫辭上」に、一陰一陽之謂_レ易。また、生生之謂_レ易。同じく乾の、象曰、天行健。君子以自強不息。

○玄妙の理は、無學にしては中々——孟浩然の題_二山房_一に、漸通_二玄妙理_一。深得_二坐忘心_一。また『老子』の首章に、常無欲_レ以_レ觀_二其妙_一。常有欲_レ以_レ觀_二其微_一。此兩者同出而異名。同謂_二之玄_一。林注に、常無常有以觀_レ之。則皆謂_二之玄_一。玄者造化之妙也。とある。

○『性理大全』——七十卷。明の永樂帝の勅撰。宋の道學者一百二十家の性理に関する説を集録したもの。

○『易經』——『周易』或は單に『易』といふ。五經の一。上下二經と十翼から成る。通説では伏羲が八卦を畫し、神農が六十四卦とし、文王が彖傳即ち卦に辭を繫けた。周公は爻辭即ち三百六十四爻に象と義を説き、孔子が之に注釋を加へた。これは宇宙の原理、萬象の變化、處世の道を陰陽の二氣で説明しようとしたもので、中國古代の哲學思想を知り得る書である。

○『書經』——『尚書』又は單に『書』といふ。五經の一。虞夏商周時代の記録を孔子が刪定したもの、今文が古く、古文は東晋の梅賾の僞作といふ。現在古文今文併せて五十八篇がある。

知也。周因_レ於_レ殷禮_一。所_レ損益可_レ知也。其或繼_レ周者。雖_レ百世可_レ知也。

○百王不易の禮、明らかなり。——『荀子』の「天論」に、百王之無_レ變。足_レ以_レ爲_レ道貫_一。とあり、楊倞の註に、無變。不易也。百王不易者禮也。とある。即ちこれは所謂殷周の因るところである。道貫とは王者一貫の禮である。

○ほかへかくれてましまさぬ君 舟はながれてかすむ海上——白樂天の長恨歌に、爲_レ感_レ君王展轉思_一。遂教_レ方士殷勤覓_一。排_レ空馭_レ氣奔如_レ電。升_レ天入_レ地求_レ之遍。兩處茫茫皆不見。忽聞_レ海上有_レ仙山。山在_レ虛無縹渺間_一。

○山住のその身は猿にさもにたり 人倫たえて鹿を友とす——蘇東坡の後赤壁賦に、漁_レ樵江渚之上。侶_レ魚鰕而友_レ麋鹿_一。

○『白氏文集』第一・第二の帙——『白氏文集』は七十五卷。

白樂天の詩文集。古くは單に文集と云ひ、『文選』と併せて選集と稱した。平安朝初期に傳來して國文學に大きな影響を與へた。何帙本かは明かでないが、第一第二の帙とあれば諷諭、間道の詩であらうか。

○三史・五經——三史とはわが國では通常『史記』『漢書』『後漢書』を云ひ、五經は『易』(周)『書』(尚)『詩』(毛)『禮』(古)は儀禮、(後)『春秋』をいひ、平安朝には、これに通ずる者を學有りと云はれ、學問の必須科目となつた。これは宋學の盛行まで續いた。乾注(例)に『枕草子』の引用があるが、「女の歌仙」の語によられたものか。しかしその名が合はな

い。

○『文選』六十卷。(もとほ三十卷) 梁の昭明太子の撰。春秋末より梁に至るまでの詩賦文章を類聚したもの。わが國への傳來は早く推古朝にある。奈良・平安に盛行し、『白氏文集』と共に長く日本文學に影響を與へた。

○巾着ぎりにあきかぜぞふく 小ゆびひとつ草木黃み落けらし——乾注(例)漢武帝の秋風辭に、秋風起兮白雲飛。草木黃落兮鴈南歸。(『文選』『古文眞寶』後集の開卷)

○『莊子』外篇「至樂篇」の、莊子箕踞。鼓_レ盆而歌。——原典に、莊子則方箕踞。とあつて、則_レ方_レの二字を脱す。また鼓は鼓が可。鼓は鼓の俗字。

○これを希逸が註して、「則是死生一貫の理を發明する所也。ほとぎをうつの説も又寓言也」と註す。——原文に、乃是發明死生一貫之理。鼓_レ盆之説亦寓言耳。とある。即ち、則是は乃是。又寓言也亦寓言耳。である。一貫に「クワン」の讀みがなは「クワン」とすべきである。

○『禮記』「檀弓篇」に、「……孔子助_レ之……執_レ女手之拳然。夫子爲_レ不聞也者。而過_レ之。」——孔子は夫子。拳然は卷然。不聞は弗聞。執_レ女手之卷然。と訓點を施すべきである。また檀弓に「タンキウ」の讀みがながあるが「タンクウ」と讀むべきである。

○俳詣は常をやぶり俗をみだること葉。——『毛詩』の大序に、厚_レ人倫。美_レ教化。移_レ風俗。(これは詩の効用を述べてた語であるが、これを逆にしたもの。常とは人倫、五常ともいふ。不易の道德。)

○第一儀我朝までも聞ゆなる 五千餘卷は有明の月 むかし——莊子が筆法あき立て——乾注(例)莊子を引合いに出してゐ

於連叔曰。云々の林注に、肩吾連叔。皆未_レ必實有_二此人_一。此皆寓言。乾注(18)に未_レを末_レに作るは誤。また、寓言也。の也の字なし。また、此人……此皆寓言の「……」とあるが、右に示した原文の如く省略はない。従つて……線は不要。また、知無_レ爲謂は、知_レ無_レ爲謂である。

○司馬遷が『史記』——司馬遷は西漢の歴史家。字は子長。父は談。十歳で古文を誦し、二十歳で天下を周遊した。父談の修史の事を繼ぎ、大史公となつて史料を集めた。時に李陵が單于に降つたことについて彼を辯護し、武帝の怒にふれて腐刑に陥り、憤激の餘、二十餘年を費して『史記』百三十卷、五十二萬言を著した、後許されて中書令となつて卒した。

○杜牧之が「阿房宮の賦」——杜牧字は牧之、樊川と號した。進士に及第の後、監察御史となり、黃州・池州等の刺史を歴任して、中書舍人となつた。剛直で奇節があり、常に天下の事を論じた。詩に長じ、豪邁清楚で、晚唐第一と稱せられる。著に『樊川集』(文集二十卷)がある。杜甫の老杜に對して小杜と呼ばれる。乾注(2)「阿房宮賦」の「長橋臥渡」の臥渡は臥波の誤。『古文眞寶』後集所收。

○『老子經』に、未_レ知_二牝牡之合_一云々——『老子』は或は『道德經』ともいふ。周の老聃字は伯陽の撰と傳ふ。凡そ八十一章、五千餘言。上下二篇となす。老子は周の衰へたのを見て去つて關に至つた。關令尹喜は老子を留めて書を著さんことを求めた。老子は尹喜のために道德の意を述べたものといふ。『老子』は無爲自然・虚無恬淡を理想とし、名利を賤しみ、聲色を斥け、清静柔弱を尚び、聖智仁義を排した。『莊子』の思想は『老子』を根本とし、これを敷衍したもの

である。世に老莊と云はれる。『史記』に、微妙難_レ識とある如く、文章は玄妙にして簡短、語句の中に深遠の意を寓し、句々押韻して古奥である。林希逸の註解を『老子虞齋口義』といふ。上下二卷。

○三皇五帝の遠きむかしは、——『周禮』「春官」外史に、掌_二三皇五帝之書_一と見える。三皇は傳説の帝王で、五帝の前にある。その人については異説があるが、太昊伏羲氏・炎帝神農氏・黃帝有熊氏。或は天皇・地皇・人皇。また伏羲・神農・祝融をいふ。五帝についても異説があるが、『史記』には黃帝・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜をいふ。

○周公旦といへる聖人出て、いにしへより夏殷二代までの禮法の、時に用らるゝをまし、用られぬをへらし、悉損益して、周の代に到りてよろづの禮をなはりて、『周禮』といふ書、世にはびこり。——周公旦は周の文王の子、武王の弟、成王の叔父。名は旦。武王を輔けて殷の紂王を滅ぼし、魯に封ぜられた。成王及び康王を助けて周室の基礎を確立し、禮樂制度は多く周公に出づると云はれる。『周禮』は周公の作と傳へられ、『周易』の爻の辭即ち象辭も彼の作と稱せられる。『周禮』は周代の法制を記したもので、古來周公旦の定めるところと傳へる。『禮記』の「明堂位」に、昔者周公……六年。朝_二諸侯於明堂_一。制_レ禮作樂。頒_二度量_一。而天下大服。と見える。『史記』の「魯周公世家」に、周之官政未_レ次序。於是周公作_二周官_一。官別_二其宜_一。作_二立政_一。また董仲舒の「對策」に、周公作_二禮樂_一。と見える。『周官』とは周の官制の意。『漢書』「藝文志」に、周官(經六篇とあり。因つて『周禮』を一名『周官』とも云ふ。『論語』「爲政」に、子曰。殷因_二於夏禮_一。所_レ損益可_レ

已。言出レ口成レ章。詞不窮若滑稽之吐酒。姚察云。云々——同じく「滑稽傳」の頭注に見える。崔皓は崔浩の誤記。始めに、滑音骨。稽。流酒器也。とあり、また不窮を、不窮竭。に作る崔浩字は伯淵。歴史を博覧して盛名あり。嘗て「國史」三十卷を著し、石を立てて直筆を彰し、爲に國人の怒を買つて、魏の太平眞君十一年に太武帝に殺された。『隋書』『經籍志』に『賦集』八十六卷を著録してゐる。

○楊慎が『史記』の解にも、人の言葉の、ものに應じ、事にわたりて、きはまりなくながれ出るころ、と書るなり。——前の「楊慎曰。……の文につづけて、余按。六書轉注。亦取應物不窮之義。とある。

○『史記』の「滑稽傳」に撰まれたる人は、……淳于髡・優孟・また武帝の時の郭舍人・東方朔、魏の文侯の時の西門豹等、これ也。——「滑稽列傳」に記されてゐる人物は、戰國の人淳于髡、優孟、優旃、漢の武帝の時の郭舍人、東方朔、東郭先生、王先生、西門豹等の傳記を略記してゐる。

○「逍遙遊篇」林希逸が注に云々——「逍遙遊」は『莊子』開卷の篇。乾注(4)に校正のミスと思はれるものがある。即ち、要字者如此揣摩。前後者正落其櫃中。何是以讀莊子。其實皆寓言也。の中で、要字者は、正・要・學・者、前後者は、前後解者、其櫃中は、其卷櫃中、何是は、何足である。林希逸は字は肅翁、竹溪又は虜齋と號す。宋の理宗の淳祐の頃に在世。端平二年の進士。官は司農少卿となり、中書舍人に終る。著書が多く、老・莊・列子に『虜齋口義』がある。何れも我が國人に親しまれた。『莊子口義』

十卷十冊。寛文以來しばしば出版せられた。

○方寸の胸中より顯出て、天地の外にうちむかひ、——「逍遙遊」の首章の林注に、此段只是形容胸中廣大之樂。却設此譬喻。其意蓋謂。人之所見者小。故有世俗紛紛之爭。若知天地之外。有如許世界。自視其身。雖太倉一粒。不足以喻之。

○齊・魯にまたがれる泰山五嶽の長たるを、いたりてすこしきなりとし、秋毫のいたりてほそきを、おほいなりとし、人生れて三月になりてはやく死せるを、いのちながしとし、彭祖が七百歳を、みじかしとする。——乾注(7)につづけて次の注があるべきであらう。即ち林注本の頭注に云ふ、五經通義。泰山五岳之東岳也。一名岱宗。また同じく、禮。

十六至十九。爲長殤。十二至十五。爲中殤。八歲至十一。爲下殤。七歲以下。爲無服之殤。生未三月。不爲殤。また同じく、廣列仙傳卷一。彭祖錢鏗。帝顓頊玄孫。至殷之末世。年已七百歲而不衰。

○『莊周』の「外物篇」に、……莊子顧視車徹中。云々——三箇所の莊子は皆周に作る。鮒魚の下に焉の字あり。何爲者乎の乎は耶。或は邪に作る。その次の鮒はなし。

○余が師、西翁の……實を僞にし、僞をまことにいひなすを、俳諧の本意云々——『史記』『滑稽傳』の、言非若是。説是若非。

○「逍遙遊の篇」の肩吾・連叔みなこの人實にあらず。寓言なりと註し、同「外篇」の「田子方の篇」に、知無・爲謂・狂屈等の人の名、みな實ならず。寓言なりと註す。——肩吾問

詩は『聯珠詩格』卷一に見える。即ち、學如三元凱、方成癖。文似相如反類俳。獨立孔門無一事。祇輸顏子得心齋。とあり、注に、司馬相如文類俳優。古之學者。務養其性情。今之學者。務悅人耳目。……俳。戲也。今言俳優是也。と見える。司馬相如は西漢の詞人。字は長卿。武帝の時孝文園令を拜す。尤も辭賦に長じ、その作は規模宏大、韻致縹緲と云ふ。「子虛」「上林」の賦はその代表作である。なほ「送劉戶曹詩」は「送劉戶曹」詩、相如の讀みがなす「さうじよ」は「しやうじよ」とすべきである。劉戶曹は劉戶曹であるが傳未詳。戶曹は民戸を司る官で、『宋書』の「百官志」に、戶曹主民戸祠祇農桑事。とある。

○鄭繁が詩に「詩語多俳諧」とみえたり。——乾注(2)に「唐書」を引いてあるが、その文に、繁本善詩。語多俳諧。は、原文は、其語である。即ち其字を脱してゐる。なほ同文が『唐詩紀事』の「鄭繁」に見える。鄭繁字は蘆武。唐の昭宗光化二年の進士。繁は詩を能くし、詠諧の語が多かつたので、時人はこれを「鄭五歇后體」と稱した。

○『史記』『莊子』のころなり。——『史記』は漢の司馬遷の著。百三十卷。もと『太史公書』と名づく。遷の父談は一史を成さんとして果さずして卒した。遷はその志を繼いで太史公の官となり、『左傳』『國語』『世本』『戰國策』等を刪り、黃帝より漢の武帝に至るまでの三千餘年の歴史を編次した。この書は紀傳體史書の祖で、本紀十二、表十、書八、世家三十、列傳七より成り、後世史家の例となつた。惟中の讀んだのは明の凌稚隆の評林本と思はれる。『莊子』は

周の莊子の撰。但し漢の武帝の頃、淮南王劉安の手によつて蒐輯整理せられたと云はれ、篇數や内外篇の分類、その筆者について異説があつて確證がない。現本は三十三卷三十三篇（内篇七、外篇十五、雜篇十一）となつてをり、内篇は莊子の親著と考へられ、莊子の根本思想を記し、外雜篇は内篇の意を敷衍したものの如くである。大旨は老子の言に本づき、寓言多く、道德を明かにし、仁義を輕んじ、死生を一にし、是非を齊くし、虛無恬淡、寂寞無爲なる意を説いてゐる。宗因が『莊子』の寓言を持ち出してから、談林俳諧の理論的根據ともなり、惟中の論は殆ど『莊子』に依據したものであつた。惟中は林希逸の注で讀んでゐる。

○『史記』百廿六卷「滑稽傳」の註に、「索隱」曰、滑謂亂也。稽者同也。云々——乾注(3)には、同書の「樛里子傳」の索隱とせられるが、明かに「滑稽傳」の註にある通りである。即ち百二十六卷の「滑稽傳」の題名の索隱に見える。なほ「樛里子傳」は卷七十一で、ここには、滑。亂也。とある。前者は惟中の引く通り、滑謂亂也。と見える。なほこの文はこの後の二項を含めて、『莊子』「逍遙遊」の林注本の頭注に引かれてゐる。

○楊慎曰、滑稽者轉注之器也。云々——『史記評林』「滑稽傳」の頭注に見える。即ち明の李光縉の増補するところの文である。楊慎は字を用修、升庵と號した。正徳六年の進士。經學詩文共に明代屈指の大家。『升庵集』八十一卷を始め著書が多い。世宗の嘉靖三十八年卒す。年七十二。『史記評林』の頭注に引かれてゐるのは、彼の『史記題評』からである。

○崔皓云。滑稽者流酒器也。轉注吐酒。終日不

と見えるのがこれである。則ち支離滅裂で、つじつまの合はない言葉である。これを「ある事ない事とり合せて活法自在」と言ひ改めたものであらう。扞言には別に臨機應變の語、調子のよい言葉といふ意もある。

注③④、「齊物論」に、天下莫大於秋毫之末。而泰山爲小。莫壽乎殤子。而彭祖爲夭。

注⑤、「徳充符」に、虚而往。實而歸。また「天道」に、休則虚。虚則實。實者倫矣。などに依つたものか。『莊子』の中にはこの語の出典と思はれるものが見當らない。

注⑥、「齊物論」に、道隠於小成。言隠於榮華。故有儒墨之是非。以是其所非。而非其所是。欲下是其所非。而非其所是。則莫若以明。林注に云ふ、人之所非。我以爲是。彼之所是。我以爲非。安得而一定。
〔史記索隱〕に、以言。辯捷之人。言是非。
〔若是。説是若非。とあるのも意は同じ。〕

注⑦、「齊物論」に、大言炎炎。小言詹詹。林注に、大言者。氣燄大者也、炎炎者。有光輝也。とある。

参考文献

乾裕幸氏校注 俳諧蒙求 古典俳文學大系4 談林俳諧集二所收

附

『俳諧蒙求』『しぶ團返答』俳諧評判之返答乾注補遺

『俳諧蒙求』『しぶ團返答』等は昭和四十七年五月、集英社刊

の古典俳文學大系4所收の『談林俳諧集二』にあつて、乾裕幸氏の校注になるものである。この書に注釋を附せられたのは、

乾氏を最初とすると思はれ、高く評價せられると思はれるのであるが、漢文關係に限つて見る時、書名・人名を始め必要な注

がかなり遺られてゐるやうであり、補正すべき點も見られる。また分つてゐるやうな事項についても、初心者のために少しく

蛇足を加へる必要もあらうかと思はれるのである。そこで漢文關係に限り、乾氏の注の缺漏を拾ひ若干の補正を試みた。従つて乾氏の注釋を主體にして、これと併せて見ていただきたいと思ふのである。

『俳諧蒙求』 乾注拾遺

○諧者、『説文』に語也。また『廣韻』の註に偶也。——『説文』は正しくは『説文解字』といふ。十五卷。後漢の許慎の著。十四篇、五百四十一部に分つて九千三百五十三字。(内異體字一千)の字源の解説をした字書である。「語」は『説文』百六十三字に「詒」に作る。「詒」は諧の意。『廣韻』は韻書。正しくは『大宋重修廣韻』。宋の眞宗の勅命により、景德四年陳彭年が撰したものである。「唐韻」を増補したもので、二百六韻に分類整理してゐる。「偶」は『釋文』に諧とある。

○『前漢書』——『後漢書』に對しての稱。單に『漢書』ともいふ。一百二十卷。後漢の班固の撰。高帝より平帝に至る十二世二百三十年の歴史を記した書。紀表志傳凡そ百篇。『史記』と併せて『史漢』と稱せられる。惟中の見たものは明の凌稚隆の『漢書評林』一百卷であらう。

○『字彙』——字書。十二卷、首末二卷。明の梅膺祚の著。畫引字書の祖。即ち字畫の多寡によつて分類して凡そ十二集とす。一畫より十七畫まで二百十四部、三萬三千一百七十九字に及んでゐる。

○呂與叔「送刘戸曹詩」の第二の句に、「文似相如反類俳」と作る。——呂與叔は宋の大儒。呂大臨、芸閣と號す。二程子に師事して、謝良佐・游酢・楊時と共に程門の四先生と稱せられた。群書に博通し、詩文に巧であつた。この

る内容を取つて寓言の中に投入したものであらう。

「四 翻案

翻案は寓言に比して、論ぜられるところが少いのであるが、惟中の重要な主張であつたことは、次の文によつて明かである。

古事、ものがたりをも、あらぬ事に引たがへて翻案すると、寓言のうそをつくつと、これふたつを本意とするべし。また『しぶ團返答』にもいふ。

たまかづらをいつもゆふがほのむすめごとおもふははいかないらず。そのことを翻案するをはいかいといふ事ぞ。…たまかづらをうかれめにしたこそやさしけれ。

翻案とは、『詩人玉屑』巻七に、反^{シテ}其^ノ意^ヲ而^レ用^フ之^ヲとある。

前行する作品を案とし、その趣旨を打翻して作ることである。惟中の云ふ「古事、ものがたりをも、あらぬ事に引たがへ」ることである。これは文學作品を作る場合に、初心者より大家にいたるまで、しばしば用ひる手法である。従つて翻案それ自體は決して滑稽や諧謔の意味を持つものではないが、惟中の言ふところの俳諧について見れば、なかなか皮肉や諧謔の作品が作り易く、俗受けがして、容易に喝采を博し得るものである。狂歌や川柳に好んで用ひられるのはこれがためである。かかる翻案の例を次に二つ擧げると、

夏の月蚊を疵にして五百兩

其角

秋來ぬと合點させたる噺かな

燕村

前者は、有名な東坡の「春夜」の詩の、春宵一刻直千金。後者は「古今集」の敏行の、「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」の翻案である。二つの句の案となつて

ゐる詩と歌は、全く諧謔の意のないまじめなものであるが、翻案された句は何れも諧謔の氣分が眼目となつてゐることは論を待たない。かういふところが惟中の俳諧論に取入れられ、寓言と共に二つの本意となつたのである。

(三)

以上惟中の俳論を『俳諧蒙求』によつて概見したのであるが、右のやうな滑稽寓言が眞の俳諧であるとすれば、誠に痛快極るものではあるが、一方甚だ亂暴なものと云はざるを得まい。否、寧ろその亂暴が俳諧の根本義に鑑みて、俳諧たる所以であるのだから、讀む者は眞面目になれない迷惑なものとなるであらう。惟中は實作の面で必ずしも理論の如くではないが、學ぶ者は彼の寓言を修得しなければならぬことになるであらう。然らば一時に昌盛たり得ても、長きにわたつて流行することの出来ないのは當然であり、かかる論争がくり返されてゐる間は、俳諧は永く和歌・連歌の下風に立つことを餘儀なくせられるであらう。結局惟中は左右に事を構へることになり、談林も芭蕉の出現によつて自ら衰退の途を辿ることとなるのである。

注①、「逍遙遊」の首章の林注に、此段只是形容胸中廣大之樂。人之所見者小。故有世俗紛紛之爭。若知天地之外有如許世界。自視其身。雖太倉一粒。不足^レ以^レ喻^レ之。

注②、「寓言」の、卮言日出。和以天倪。この「卮言」には數説あるが、『釋文』に、王云。夫卮器。滿卽傾。空則仰。隨^レ物而變。非^レ執^レ一守^レ故也。施^レ之於言。而隨^レ人從^レ變。已無^レ常^レ主^レ者也。司馬云。謂^レ支離無^レ首尾^レ言^レ上也。

(5)

がこれである。寓言について「莊子」の論を聞くと、

親父^ハ不^ニ爲^ニ其^ノ子^ノ媒^上。親父^ハ譽^レ之^ヲ。不^レ若^下非^ニ其^ノ父^ノ者^上也。非^ニ吾^ノ罪^ニ也。人^ノ之^ノ罪^ニ也。與^レ己^ノ同^レ則^レ應^レ。不^レ與^レ己^ノ同^レ則^レ反^ス。同^ニ於^ニ己^ノ爲^レ是^ト之^ヲ。異^ニ於^ニ己^ノ爲^レ非^ト之^ヲ。

右の意は、父は自ら吾が子のために媒灼人とならないのは、父が子を譽めても人は信じないであらう。他人がこれを譽めるのには及ばないのである。父が譽めても他人が譽めても同じことであるが、聞く人に與へる感じは異なるのである。従つて寓言を用ひるのはこちらの罪ではなく、寓言を用ひなければ信じられないからである。これと同様に、自分の説として言へば、人は自らの説と異れば之を非とするのである。だから他人に託して言ふのである。即ち自分の説を他人の説として語らしめるわけである。かくして他人からは信じられることになるといふのである。これが寓言の効用である。

しかし惟中の寓言論は他に假託して言ふと云ふ意からは出發してゐるのであるが、これが彼の俳論となるにいたつては、かなり意味が擴大せられてゐるのである。次に惟中の言ふところを順序に従つて整理してみようと思ふ。即ち、俳諧とは、

一、「方寸の胸中より顯出」するものである。

二、その内容は「天地の外にうちむかひ、自由變化の趣向をおもひめぐらす」もので、

三、「ある事ない事とりあはせて、活法自在の句躰」が眞の俳諧である。更にこれを具體的に言へば、

四、「大小をみだり」
五、「^④「^③「^②「^①「^⑤「^⑥「^⑦「^⑧「^⑨「^⑩「^⑪「^⑫「^⑬「^⑭「^⑮「^⑯「^⑰「^⑱「^⑲「^⑳「^㉑「^㉒「^㉓「^㉔「^㉕「^㉖「^㉗「^㉘「^㉙「^㉚「^㉛「^㉜「^㉝「^㉞「^㉟「^㊱「^㊲「^㊳「^㊴「^㊵「^㊶「^㊷「^㊸「^㊹「^㊺」
六、「虚を實にし、實を虚にし」、「たゞ言葉をかざりはなをさ

かせ、「古事、ものがたりもあらぬ事に引たがへ」
七、「^⑦「^⑧「^⑨「^⑩「^⑪「^⑫「^⑬「^⑭「^⑮「^⑯「^⑰「^⑱「^⑲「^⑳「^㉑「^㉒「^㉓「^㉔「^㉕「^㉖「^㉗「^㉘「^㉙「^㉚「^㉛「^㉜「^㉝「^㉞「^㉟「^㊱「^㊲「^㊳「^㊴「^㊵「^㊶「^㊷「^㊸「^㊹「^㊺」

「實を偽にし、偽をまことにいひなす」ことが寓言である。従つてこれに依據するところの俳諧は、

八、「^⑧「^⑨「^⑩「^⑪「^⑫「^⑬「^⑭「^⑮「^⑯「^⑰「^⑱「^⑲「^⑳「^㉑「^㉒「^㉓「^㉔「^㉕「^㉖「^㉗「^㉘「^㉙「^㉚「^㉛「^㉜「^㉝「^㉞「^㉟「^㊱「^㊲「^㊳「^㊴「^㊵「^㊶「^㊷「^㊸「^㊹「^㊺」

九、「常をやぶり、俗をみだること葉」で、「かいでまはるほどの偽をいひつゞくる」ことを俳諧の骨子であるとし、

十、「^⑩「^⑪「^⑫「^⑬「^⑭「^⑮「^⑯「^⑰「^⑱「^⑲「^⑳「^㉑「^㉒「^㉓「^㉔「^㉕「^㉖「^㉗「^㉘「^㉙「^㉚「^㉛「^㉜「^㉝「^㉞「^㉟「^㊱「^㊲「^㊳「^㊴「^㊵「^㊶「^㊷「^㊸「^㊹「^㊺」

以上大略十項目にわたるものが、惟中の所謂寓言の持つ意味内容であつて、俳諧の實際面について實行すべきことであると考へたやうである。

しかし寓言とは前に述べた如く、事實を他の事物に假託してその意を寓することであつて、この中に活法自在にして、大小・壽夭・虚實・是非を取り違へたり顛倒したり、或は勝手放題に言ひ散らし、醇風美俗を亂すやうな意味はもとも含まれてゐない。惟中が敢てこのやうな多岐な意味を持ち込んだのは、甚だ無理と云はざるを得ない。ただ「莊子」の寓言の中には、鯤鵬の變化、蝸牛の蠻觸などを始めとする曠恣怪奇、奔放逸脱で、常規をもつて論じ得ない荒唐無稽な話が多い。しかしそれは寓言の素材であつて、寓言の字義ではない。「莊子」の主張する彼一流の道德を明かにし、仁義を輕んじ、死生を一にし、是非を齊くするものを、朝菌・冥靈・齧缺・主倪・庚桑楚などに託して述べんとしたものである。惟中はこの怪奇奔放な

うちむかひ、自由變化の趣向をおもひめぐらし、ある事ない事とりあはせて、活法自在の句躰を、まことの俳諧としるべし。……かの大小をみだり、壽夭をたがへ、虚を實にし、實を虚にし、是なるを非とし、非なるを是とする『莊子』が寓言、これのみにかぎらず、全く俳諧の俳諧たるなり。しかあれば、おもふまゝに、大言をなし、かいでまはるほどの偽をいひつくるを、この道の骨子とおもふべし。西翁の書こし給ふ文のうちに、……紙子ににしきの多りさしたるやうに、一興あるを俳諧と申とかや。このごろの句どもは、紙子なれば紙子、にしきなればにしきにて、是非ともに理を正しくいひつめて、あるはつよ過、あるはうつくし過、興なく覺候。また實を偽にし、偽をまことにいひなすを、俳諧の本意と承置候。

『莊子』が寓言、俳諧の根本也。

俳諧とても連歌和歌のすがたなれば、その躰にもるべからずとて、あまりにきつところへて、その法をまぼれば、皆格になづみ、法式にはまりて、一句のしたてかたくなり、よはくなり、かの根本の寓言を忘れがちなるといふこととはり也。八雲の御抄に、俳諧の名に九つの品を分てり。そのうちに狂言といふ一名あり。この狂言の字にて、返々俳諧の大意をこゝる得べき事なり。

『莊子』が寓言、『老子』の虚無底、俳かいにある所なり。「おやのしぬる時へをこきて」としたる作意、更にとがむべきにあらず。

禮法の外にほしいまゝなるが、俳諧の根本なりとしるべし。……『莊子』の原壤らが道におゐての俳諧師なり。俳

諧は常をやぶり、俗をみだること葉なれば、もし、ある前句に到りては、「おやのしぬる時、へをもこきけるよ」と作意すべし。

俳諧は猶その本意をたづねず、たゞ言葉をかざり、はなをさかせ、古事・ものがたりをも、あらぬことに引たがへて翻案すると、寓言すると、寓言のうそをつくと、これふたつを本意としるべし。

俳諧はなんぞ。莊周がいへらく、滑稽なり。とはなんぞ。是なるを非とし、非なるを是とし、實を虚にし、虚を實にさせる、一時の寓言をいふならんかし。

右によれば、俳諧は眞實を寫したり、格や法式に依つた正直でまじめの作品ではない。『莊子』の寓言が俳諧の根本である。『莊子』はその殆どが寓言から成つてゐるが、それらはすべて俳諧であつて、しかも俳諧中の眞の俳諧である。然らば寓言とは何か。『莊子』二十七に「寓言」があるが、その首に、
寓言十九。……寓言十九。藉外論之。とあり、その林希逸の注に、

寓言者以己之言。借他人之名言之。十九トハ、
者言。此書之中。十居其九。謂寓言多也。

と説明してゐる。即ち寓言とは他のものにかこつけて言ふことである。寓は寄の意。人が自分を信じないために、ことさらに自分の言ひたいことを、他人に托して言ふのである。かくすれば人はこれを信じるといふ。然らば寓言とは自分の言ひたいことを人にかこつけて言はせることである。十に九とは「莊子」の文は十中の九まで寓言より成るの意である。『史記』の「莊周傳」に、其著十餘萬言。大抵率寓言也。とあるの

「二 俳諧と滑稽

俳諧といふこゝろ、もろこしの書には『史記』『莊子』のこゝろなり。……これらの心を考れば、俳諧と滑稽とひとしき名なり。滑稽は酒のうつはものなり。そのうつはものまるびて、その酒をはく事、ひねもすやまざるにたとへたり。口よりながれ出て句となり、そのこと葉のつきざる事、滑稽の酒をはくにおなじとあり。されば楊慎の『史記』の解にも、人の言葉のものに應じ、事にわたりて、きはまりなくながれ出るこゝろ、と書るなり。思案も分別もさまざまもちひすして、なだらかにながれ出る作をこそ、俳諧の上手とも堪能ともいふべけれ。

この滑稽の字義の解説は、流石に漢學の造詣の深さが知られる。もともと滑稽には諧謔の意味はなかつた。辯捷にして如何なる難問にも窮することなく、變通自在、臨機應變の解答の出来ることを云つた語である。惟中の右の所説は『史記』の「滑稽傳」の注の、酒器の酒を吐いて終日已むことのない意に據つたものであるが、この「滑稽傳」によつてその意が敷衍せられて、諧謔の意になつたものであらう。従つて「俳諧はなんぞ、莊周がいへらく滑稽なり。」と云はれ、そして「滑稽傳」に登場する人物の、

皆口のかはのきいたる手だれ、……であつて、

無盡活法の姿をうつし出す俳かいの寓言たれば、とにもかくにも、このさかひに入て、多年の工按をめぐらさば、まことの俳かに悟入すべし。

と「滑稽傳」中の人物の如くであるべきを説いてゐる。即ち俳

諧と今云ふ滑稽とは同義であつて、俳諧は滑稽でなければならぬことを論じてゐる。

崔皓云。滑稽者流酒器也。轉注吐酒終日不巳。言出口成章。詞不窮若滑稽之吐酒。……姚察云。滑稽者猶俳諧一也。(崔皓は崔皓。また窮の下に續けて云ふ、以言諧語滑稽。其知計疾出。故云滑稽也。)

楊慎曰。滑稽者轉注之器也。若漏卮之類。以比人之言語捷給應對不窮也。(『史記評林』の頭注に見る。これは明の季光緒の増補によるところで、この文に續けて、余按六書注。亦取應物不窮之義。とある。)かくして惟中は云ふ、俳諧は滑稽である。そして滑稽の原義の如く、流酒の器の酒を吐いて已まざることく、臨機應變に、思案も分別も用ひずに、なだらかに言ひ出すことである。

滑稽の原義は右の如くであつても、今の所謂諧謔や巧みに是非を言ひくるめる意も重要であらう。惟中は「莊子」「逍遙遊」の林希逸の註を取出して云ふ、

不知是滑稽處。如今人所謂斷頭話也。斷頭話とは圖無い話、大げさな話である。この斷頭話は惟中の云ふ、

思ふままに大言をなし、かいでまはるほどの偽をいひつくるを、この道の骨子とおもふべし。

これも次の寓言論の内容の一を形成するものである。

「三 俳諧と寓言

惟中は俳諧は寓言であるといふ。

『莊子』の一部の本意、これ俳諧にあらずといふ事なし。

……これ即ち心の天遊、變化の自然の自在在底也。しかれば、いままする俳諧も、方寸の胸中より顯出て、天地の外に

を前に擧げて、その出典を次に掲げてみようと思ふ。これは先づ惟中の所説を聞かんがためである。

「一 俳諧の字義

俳諧といふは、たはぶれること葉のひやうふつと口よりな
がれ出て、人の耳をよるこぼしめ、人をしてかたりわらは
しむるころをいふなり。

誠は俳諧のたはぶれ也。一首たはぶれをあらはして俳諧を
しらしむるもの也。

右によれば、俳諧の本義は戯言の人を談笑させるものであるといふ。この根據として次の出典を示して右の結論を導き出してゐるのである。

俳者「説文」に戯也。今言ふ俳優是也。

優の字も「字彙」に、たはぶるゝなりと註せり。

諧者「説文」に語也。

また「廣韻」の註に偶也。

「前漢書」に、「談笑類俳倡」の倡の字も「字彙」にたはぶれと解す。

呂與叔の送劉戸曹詩の第二句に、「文似相如反類俳」と作る。

またたゞちに俳諧とつゞけぬる事は、鄭榮が詩に「詩語多俳諧」とみえたり。

と語意用例を明かにしてゐる。實に俳の意は戯であり、俳戯と熟して用ひられる。俳優の優も亦た戯の意がある。(「正字通」)

「説文」には、優、饒也。一曰倡。とある。饒は段注に、優柔、俳優の意と見える。惟中は、諧者「説文」に語也。と云ふが、「説文」には詒とあつて語とはない。蓋し誤記であらう。

諧、詒也。詒、諧也。と見える。即ち「やはらぐ」「かなふ」意である。諧諧とは冗談、おどけの意であるが、人の心にかなひ面白く感じさせる言葉である。また「廣韻」の註に「偶也」とあるが、「釋文」に、偶、諧也。とあるから字義は同じである。また偶は耦でもあり、諧は前述のやうに「かなふ」意であり、耦は相對する意、向き合つてゐる意である。従つて諧偶とは一緒に仲よく話すことで、耦語は相對して語る意。諧語は韻を踏んだ一種のしやれ語である。即ち俳諧の字義はおもしろみやおかしみのある言葉である。

「前漢書」の、談笑類俳倡。の倡の字は、「字彙」に「たはぶれ」と解する。即ち俳と同義である。しかるにこの文は「漢書」卷五十一の「枚乘傳」に見えるが、談笑は詼笑である。注に、李奇曰。詼、嘲也。とあつて、枚乘の子臯が經術に通ぜず、俳倡に類する人物であることを述べた語である。俳倡とは藝人、俳優の意で、顔師古の注に、俳、雜戲也。倡、樂人也。とあるやうに、その戯より言へば俳であり、その樂の面より云へば倡である。實質は同じであるから俳倡と熟して用ひられるわけである。従つてこの方は「わざびと」「わざぎき」、今の所謂俳優である。

右によれば、俳諧の第一義は俳戯、諧謔であるが、この意からわざびと、今の所謂俳優の意が出た。この惟中の所説は正しいが、惟中の求めた俳諧の意は前者であつて、「前漢書」の引用は第二義であるから妥當を缺くと云はざるを得ない。惟中は第一義の傍證としやうとして誤つたわけである。何れにせよ惟中は俳諧の意を、おかしみのある言葉、諧謔にあるとし、これを以て俳諧の根本義と考へたのである。

岡西惟中の俳論

附、『俳諧蒙求』『しぶ團返答』『俳破邪顯正
 評判之返答』の乾注拾遺

仁 枝 忠

(昭和五十一年九月四日受理)

(一)

惟中は寛文九年宗因の弟子となり、談林の理論家として活躍した。先づ延寶三年四月(任口の序に孟夏吉日とあり)『俳諧蒙求』を著して談林俳諧の本義を闡明し、次いで南都去法師の『しぶうちわ』に對して反論した『しぶ團返答』(延寶三年九月の自序あり)を書いた。更に隨流が高政の『俳諧中庸姿』を論難した『俳諧破邪顯正』に對し、惟中は延寶八年二月『俳諧破邪顯正返答』を書いて論駁した。その翌月、この反論の『俳諧破邪顯正返答之評判』に對して、彼は直ちにその月の下旬に『俳諧破邪顯正評判之返答』を書いて再駁論した。この惟中の『俳諧蒙求』『しぶ團返答』『俳諧破邪顯正返答』『俳諧破邪顯正評判之返答』の四著と『一時隨筆』及び『俳諧三部抄』によつて、惟中の俳論を知り得るのであるが、この小稿では主として『俳諧蒙求』によつて彼の俳論及びその背景となつた中國の典籍との關係について考察しようと思ふ。『俳諧蒙求』に「眞實の物我をやめて、とくと心をしづめてかの『蒙求』を見るべし。」(『蒙求』とは『俳諧蒙求』を云ふ)とあるやうに、惟中の力を用ひたところであつて、自信のほどが窺へる

のである。従つて惟中の俳論はこの書によつて見れば大過なからうと思はれるのである。

(二)

彼は俳諧の字義について次の如く説いてゐる。これは、先づ字義を明かにして、それからその本義を考察しようとするものである。

俳諧の二字、第一、この二字のころをよく會得せざれば、俳諧にはならぬ事なり。

と記し、俳諧をするためには、先づ俳諧という字義の精神を會得せよといふ。それには『説文解字』に據つて俳諧の字義を考へ、『字彙』『廣韻』等の字書を始め、史書或は詩文について、古い用例に依つて原義を明かにする。この研究法や説論の順序は、學者の最も基本的態度であつて、惟中が漢學を業とした一面がよく現はれてゐる。俳諧の語は勿論漢字であるから、漢籍に見える古い意義出典を考察することは重要なことであるが、それが總て直ちに現時の意味内容を規定し妥當するかといふことになると甚だ疑問であるが、當時權威を持つてゐた中國の古典のことであるから、乾氏も論ぜられるやうに、『莊子』『史記』等によつて統一的に根據づけ、貞門派からの攻撃に對して、據つて以て戦うべき保壘として構築せられたものであつたと思う。(『談林俳諧集』の解説)と云はれる通り、漢文學の優位が一般の風潮であつたことから、中國の古典を背景に議論を進めたことも、大きな理由であつたと思はれる。

惟中は漢籍の典籍を前面に掲げて、その意味を次に述べてゐるのであるが、今これを逆にして、惟中の言はんとするところ